

江戸時代末、朝鮮半島に漂流した日本人（その4）

朝鮮半島に漂流した日本人についての4回目。前回述べたように、朝鮮国に漂流した9人の漁師は、無罪ということで決着しました。では、なぜ長崎奉行所は薩摩の漁船の密貿易を疑ったのでしょうか。今回は、このことを考えてみたいと思います。

■薩摩藩に対する長崎奉行所の考え■

密貿易を疑った理由の一つは、今回の事件が起こる10年ほど前に、薩摩の船による密貿易が発覚していたという事実です。具体的には、薩摩の船が「唐物」を越後（現在の新潟県）沖へ運んで売りさばいていたようです（山脇悌二郎『長崎の唐人貿易』（新装版、1995年、270ページ）。今回の事件も、薩摩の漁船が「唐物」を運び、日本海のいずれかの港で密貿易をしようとしていたところ、途中で漂流し、人間は長門国に、積み荷は北部九州沿岸に、それぞれ漂着したのではないかと疑ったのでした。

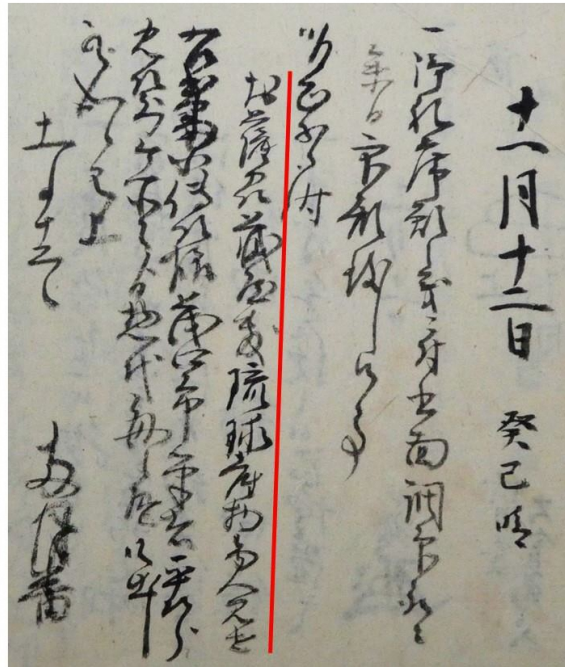
もう一つは、1810年（文化7）、薩摩藩（鹿児島藩）が琉球産物を長崎において、限定的ではありますが、販売することを、幕府から公認されたことです。薩摩藩は公然と長崎貿易に割り込んできたのでした（山脇同書、268ページ）。薩摩の品が入ってくることで、相対的に長崎のもうけが減るわけで、貿易都市長崎にとって薩摩藩はやっかいな存在だったのです。以上のことから、長崎奉行所は薩摩の漁船の密貿易を疑ったと思われます。薩摩藩に対して、相当怒っていたのでしょう。

■薩摩藩による長崎での琉球産物の販売■

それでは、薩摩藩が長崎でおこなっていた琉球産物の販売の実態はどのようなものだったのでしょうか。京都からやって来て、長崎に駐在し（「長崎在番」）、貿易業務（輸入業務）をおこなっていた、京都 ^{しゆくろ} 宿老の ^{こちべ} 巨智部忠陽という人物が

います。彼が記した業務日誌「要録」（長崎歴史文化博物館蔵）が残っていますので、これを見てください（画像7）。

十一月十二日 癸巳 晴
一 御礼席願之義二付書面調印取二
参る印形致し候事
明正五ツ時
於薩州蔵屋敷、琉球産物商人見せ
右出番小傳次様・茂四郎・筆者平次郎・
忠左衛門、ケ所々より惣代毎之通御出し
可被成候、已上
十一月十二日 両月番



(画像7)

1846年（弘化3）11月12日条に「明正五ツ時 於薩州蔵屋敷、琉球産物商人見せ」との記載があります。明日の午前8時ごろ、長崎にある薩摩藩の蔵屋敷において、琉球産物を商人に見せるという内容です。琉球の産物といっていますが、翌13日条には「爪・鼈甲」（べっ甲細工の原料）と具体的な商品名が出てきます。つまり、南洋の産物である「爪・鼈甲」を、おそらくは中国経由で輸入し、それを琉球産物として、長崎で売りさばいていたということになるでしょう。薩摩藩が幕府から公認された、長崎における商売の実情とはこのようなものだったのです。長崎奉行所が怒るのもわかるような気がします。

■おわりに■

今回は、江戸時代の末、朝鮮半島に漂流した日本人について、4回にわたって紹介しました。最後に、この文章を書きながら、勉強になったこと、興味を持ったことなどを述べて終わりにします。

朝鮮国へ漂流した薩摩の漁船は、薩摩国坊津浦を出発し、途中天草および五島玉之浦で漁師を雇い、五島沖で漁をしていた時に大風・高浪にあっています。この漂流した人々は、現在でいうと長崎県・熊本県・鹿児島県の人たちということになります。江戸時代の漁民が、このように広域なネットワークを持ち、共同で漁をおこなっていたことは、かなりの驚きでした。（その3）に出てきた、漁船の持ち主で出資者の栄助は、供述調書「口書下」の中で「是迄漁船人数不足之節者、薩州・五嶋・天草郡右三ヶ所互二雇入候仕来」（これまで漁師が不足した時は、薩摩・五島・天草の3カ所で、互いに雇い入れる慣例）だったと述べています。この時代の漁師のたくましさや、五島沖の漁場がいかに魅力的だったかということを感じました。

次に、長崎奉行所と、各藩や旗本領との間の連絡が長崎でおこなわれていたことです。長崎に蔵屋敷がある藩は蔵屋敷に詰めている聞役を通して、蔵屋敷を置いていないけれども長崎の町人を用達として指名している富江領はこの用達を通して連絡がおこなわれていました。このように、長崎という土地は情報の結節点としての役割を果たしていたのです。このことは、長崎の特徴の一つとして、この「長崎学 Web 学会」でも何度か述べてきたところですが、今回も同様な例を見出すことができました。貿易港としての長崎は、モノだけでなく、情報も集まる都市だったといえます（おわり）。

【長崎県文化振興課 石尾和貴】